

目的 最近の家計動向のしつつ、ニブかいの増加傾向が指摘されている。この世界家計内即で生じている個人別消費の増大は、どのような経済的状況を契機として生じ、また今日生活=家計にどのような問題を提起しているのだろうか。とこそで、世界の個人消費の実態把握については現在のところあまり行はれていないようである。そこで今回、短大生の個人消費の実態をみる中の上記の問題について検討した。

方法 兵庫県芦屋市にある短大の学生を対象に、昭和58年、59年の2度にわたり、家計簿式の個人消費調査を行った。調査日はそれぞれ6月-7月の1ヵ月間である。対象者数は58年度が243、59年度が211であった。分類・集計は総理府「家計調査」に準じて行った。なお、この調査は授業の一環として行い、集計作業については基本的に学生自身によるが、全体集計は息俵後に行った。

結果 ここでは「目的」で述べた内容をより鮮明にする意味で、自宅通学学生の個人消費を分析対象とする。また集計処理上、消費支出に限定して分析する。まず、学生の基本的な生活状況であるが、家族の職業、世界収入の記入率が低いためその実態はよくわかっていないが、学生本人がアルバイト勤務をしているケースがかなりあった。つまり、世界家計からみればとして見れば(主に本人の収入)に他アルバイト収入を得て、それらを消費にあてているのである。支出ではとくに外食、洋服、書籍費の割合が高い。この中で、外食の増大については、近年世界家計に与える食料費の低下現象と考へ合わせると、世界家計と個人別消費の関係・問題をより一層と考へられる。